

札幌植物雑記帖

原 松 次

エゾエノキは集果が容易

果実は小枝についたまま晩秋一斉に落下するので必要があればそれを拾えばよい。南31条西11丁目（右山通り）には目通りの直径大きいもので約60 cmを含め10本ほどの木があり、その下にはあちこち小苗も生えている。一向に見栄えがしない花ではあるがそのさかりは開葉始めと同時の5月10日頃である。成熟につれ緑から黒へと色変りする、その果実の落ちざまを確かめたくなりそこを尋ねた。60年11月11日である。それらの樹冠は枯葉で彩られているかまたはすでに丸坊主で、それらには果実が全く見当らない。おかしいぞとつぶやきながら歩みよった。ふと気付くと踏みしめている芝生の中に枯葉と実をつけた小枝が無数散らばっていた。このとき初めて本種もケヤキ（道内に自生はない）同様落枝することを知った。落枝は一般に当年枝で基部にできた離層からおちており長さ5-10 cm、着果1-4個、径約8 mmの球形、果肉はやや甘く食用となる。このものは61年度は前年に反しほとんど開花しなかった。もし隔年であれば今年は花を見るであろう。エゾエノキは全国に分布するとのこと、道内では日本海側を北上し空知が北限であろうか。岩見沢市志文の市の自然保護地区（辻村氏宅）には径60 cmほどの大木1本がある。大木といえは3年前松前町のとある鎮守の森で出会ったご神木は実に堂々たるもので90 cmにも達していた。蝶マニアに人気があるオオムラサキ（私はまだ知らない）はクヌギの葉も食べるという。クヌギの実は「どんぐりころころ」の童謡で有名なように球形のため、ミズナラなどとは違いどの方向へも自由に転がすことができる。これは岩手あたりが北限とのことであるが道庁、札幌駅北口近く、中央区役

所裏などあちこちに植栽の大木がそびえ立っている。しかし花は立派に咲くが温度不足のためか結実できないようである。

ビロードホオズキの実ほうまい

60年8月28日サークル仲間と歩いているとき真駒内柏丘の草っ原で淡黄色の花を下げた一種のホオズキを見た。初ものである。小株は直立だが大きいのはほ伏状で茎長100 cmもある。全体に軟毛密生、雄しべの花糸が肥大した黒紫色でめだった。長く横走した地下茎がある。帰宅してみた文献でブドウホオズキが似てはいたがそれとは別だ。そこで帰化植物を研究しておられる浅井康宏先生（東京歯科大学）におしぼを同封お伺いした。折返し先生ご発表の「ホオズキ属の新外来品について」（植物研究雑誌昭54年9月）をいただきこの素性がはっきりした。50年9月23日札幌真駒内で村尾美智子さんが採集したものにつき同年原寛先生（東大名譽教授。61年9月死去）がビロードホオズキと命名された北米原産の *Physalis heterophylla* である。また米名は *Clammy ground-cherry* とのこと。本種のいわゆるホオズキは大きさ3-4 cm、中にある多汁の果実は径10 mm位、9月上中旬に共に熟して淡黄色となる。アメリカではこれを生か加工して食べるという。「芝生のサクランボ」にふさわしく甘酸っぱくてなかなかの味である。なお褐変すると果柄ごと自然に落ちる。小鳥が種まきするとみえ公園を中心とした真駒内以外石山、北区などにもある。

イヌノフグリ（本紙1号P. 2）は私のミス

61年5月心待ちしていた花を見に行ったら、それはピンクでなくて青色でした。軽卒でした。そこで浅井先生を再び煩わせたところ、欧州原産の *Veronica opaca* とのこと、このほど植物研究雑誌62年1月号に「新帰化植物アレチイヌノフグリ（新称）について」として発表されました。